

豊山先生が残したもの

前田豊山

「※ひと まこと なくんば たたず

きりつを つつしみ れいぎを げんとす」

子どもたちの元気な声が、種子島の青い空にひびきわたつ

ています。榕城小学校から聞こえてくるこの言葉は、今から

およそ百四十年前、榕城小学校の校長先生だった前田豊山

が残した言葉です。

豊山は、一八三二年（天保二年）、種子島に生まれました。



【前田豊山】

【豊山の言葉（榕城小学校）】



人は、誠実でなければ、役に立つ人間にはなれない。

きまりを守って、礼儀正しくすることが大事である。

小さいころの豊山は、体がとても弱く、よく病気をしていた。お父さんやお母さんはそんな豊山を、とても心配していました。そこで、豊山は、「水を浴びて、体をきたえよう。」と、一つの目標を立てました。体をきたえるためだといっても、毎日、冷たい水を浴びるのは大変でした。やりたくない日や寒くてつらい日もありました。でも、「がんばれ、がんばれ。」と、自分をはげましながら、決めたことは最後までしつかりやり通すことができたので、弱かった体もだんだんじょうぶになっていきました。

豊山のお父さんは、大変きびしい人で、「勉強だけではな

【関連年表】

一八三一年 誕生

一八七五年ごろ

現在の榕城小学校の学頭（校長）になる。

一八九六年

大日本教育会より

表彰される。

一九一三年 死去

一九二三年

榕城小学校の校庭に石ひが建てられる。

【種子島の位置】



く、人のためにがんばる人になりなさい。」といつも教えて
いました。豊山もお父さんの教えを守り、一生けん命が
りました。このように、豊山は、お父さんからいろいろなこ
とを教えてもらうことができたので、大人になつて、種子島
のおとのさまに勉強を教えることができました。

しかし、そのころの種子島には、学校に行きたくても行け
ない子どもたちがたくさんいました。そこで、豊山は、勉強
をしたいと思つている人はだれでも、学校に行つて勉強でき
るようにしたいと考えるようになりました。そして、

「学校に行けない子どもたちがいるのは、かわいそうです。



種子島に学校をもっとつくってください。子どもたちの未来のためにも、種子島の発展のためにも学校が必要です。」
と、地域の人たちにお願ひして回りました。しかし、

「種子島には、学校が※三つもあれば十分だよ。」

と言われたり、

「生活が苦しいのに、学校に行つて勉強させる余ゆうなんてない。それよりも、畑や海に行つて働く方が大切だ。」

と言われたりしました。でも、豊山はあきらめませんでした。

「今、生活が苦しいのは分かっています。だから、将来種子島の人たちが、幸せになるためにも、みんなが勉強でき



※そのころの種子島には、西之表と野間、茎永に学校が置かれていた。

【考えてみよう】

どうして豊山は、地域の人たちから反対されても、学校をつくらうと思つたのだろうか。

る学校が必要なのです。」

と、力強い声で種子島の人たちにうったえ続けました。やがて、豊山の気持ち^{きもち}が地域の人たちにも伝わり^{つた}、新しく※^{あた}十
二の学校が種子島につくられたのです。学校に行けるようにな
った子どもたちは、

「豊山先生、ありがとうございます。」

「一生けん命勉強して、立派な人になります。」

と、明るく元気な声で豊山に話しかけました。

豊山は、今でも種子島の多くの人に、「種子島聖人」と呼ばれ、尊敬されています。そして、榕城小学校の校庭には、



【榕城小学校】

※一八七四年、住吉、安納、国上、現和、坂井、増田、油久、西野、下中、平山、島間、安城に学校がつくられた。

豊山の石ひが建てられました。

きつと今でも豊山は、

「ひと まこと なくんば たたず

きりつを つつしみ れいぎを げんとす」

という子どもたちの元気な声を、にっこりしながら聞いていくことでしよう。

【考えてみよう】

子どもたちに、感謝の気持ちを伝えられた豊山は、どのようなことを思ったのだろうか。

【前田豊山の石ひ】

